



「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域 マネジメントグループ 座談会 (1)

本当に必要としている人へ
研究成果を届けたい

南 哲さん

片山 恒雄さん

藤川 大祐さん

新谷 珠恵さん

独立行政法人科学技術振興機構・社会技術研究開発センター（以下、センター）「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域では、領域総括と、専門的な助言を行う領域アドバイザー、センター事務局から成るマネジメントグループが領域全体の運営を担い、現場で問題解決に取り組む人々と研究者が協働するネットワーク構築や、研究開発プログラムの推進に取り組んでいます。運営責任者である領域総括と領域アドバイザーの方々に、これまでの取り組みを振り返り、領域のネットワーク構築がどうあるべきかなど、今後3年間の領域活動や方向性について、議論をしていただきました。

座談会参加者：座長 領域総括

領域アドバイザー

領域アドバイザー

領域アドバイザー

片山 恒雄 東京電機大学 教授

新谷 珠恵 社団法人東京都小学校PTA協議会 会長

藤川 大祐 千葉大学教育学部 教授

南 哲 浜松大学健康プロデュース学部 教授

■ アドバイザーとしてさまざまな視点を持ち、具体的な成果を導く

片山 恒雄さん（以下片山さん） 「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域が設立されて3年が経ちました。皆さんには、領域アドバイザーとして運営に携わり、各プロジェクトへ専門的な助言をしていただいています。今日は、これまでを振り返り、良かったこと、悪かったこと、意外だったことなど、忌憚ない意見を伺いたいと思います。

南 哲さん(以下南さん) 私がこれまで経験してきた研究は、1つのテーマに単独または数名で取り組むというものでした。この領域は、テーマの範囲が広いということもあり、多種多様な分野の人が関わっています。また、研究者だけでなく他業種の人たちとも連携するむずかしさを感じました。そして、設定したテーマに対しての成果が見えにくい。私たちはアドバイザーとして、プロジェクト進行に解決すべき事柄があった場合、積極的にアドバイスすべきだと思いました。

また日頃から、片山総括が「先生」ではなく「さん」で呼び合おうと提唱をしていますが、研究に対しては全員平等に参加するという深い意味があり、非常に意義があると思います。

片山さん もちろん、各プロジェクトには研究者として優秀な人材が集まっています。ただ、限られた時間の中で成果を出していくためには、私たちも一緒になって考え、時には適切な助言をする必要もありますね。

藤川 大祐さん(以下藤川さん) 私は領域設立2年目から参加させていただいていますが、この領域というものがわからないのです。研究者同士が平等な関係でやっていくのか、高名な先生にリーダーシップを取ってもらうのか、何を良しとするのでしょうか。そしてこの領域という集団は、何をする集団なのかが見えないのです。研究して発表することが目的なのか、社会実装という、社会における具体的な問題を解決する取り組みが目的なのか。自分自身の中では明確になっていません。

新谷 珠恵さん(以下新谷さん) マネジメントグループには、現場の人間として参加させていただきました。私の目的ははっきりしています。道しるべを示してくれるのではと、期待してきたのです。例えば、いろいろな地域で子どもの見守り活動をやっていますが、皆さん手探り。まずは何か始めてみようとか、ある地域のやり方を真似てみようとか、成果があるかどうかはわからないけれど、やらないという選択肢はないというのが現状です。科学的な知見や手法による研究で、有効であるという結果が出たのであれば、その方法を取り入れたいと思います。ただ、研究者の視点と、私たち現場の人間の視点が違うこともありますので、より一層、現実を踏まえた研究をしていただき、有効な手段を見つけてほしいと期待しています。

それから、この領域には行政的な視点が少ないと思います。社会の仕組みに即した観点や法律など、大から小への視点がもっとあっても良いのではないのでしょうか。例えば教育基本法。法律が改定され、学校現場は一変しました。

片山さん 私も含めてですが、研究者は大から小への視点が苦手なのです。しかし、その視点は必要。教育基本法が改正され、学習指導要領が提供されるから、新しいやり方が現場に普及するということですね。

南さん 具体的で有効な成果があるといえば、「虐待など意図的な傷害予防のための情報収集技術及び活用技術」(代表者:山中 龍宏 独立行政法人産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター子どもの傷害予防工学カウンスル代表、以下、山中プロジェクト)は評価できると思いますね。傷の位置で、虐待など意図的な傷害か不慮の傷害かがわかると知りました。この領域ならではの研究で、犯罪からの子どもの安全という観点から見て効果があると思います。欧米では、子どもが泣いていると、近所の人が警察などへ通報します。日本では、あの時泣いていましたという事後報告が多い。虐待など意図的な傷害の早期発見につながるよう、広く普及してほしいですね。

新谷さん 虐待など意図的な傷害にどこまで介入していいのか悩んでいるのは教師です。だからこそ教師の後押しになる研究成果であると思いました。山中プロジェクトが世の中を変えるかもしれませんね。連携が大切だと理解していても、組織が異なると意思の疎通を図ることが難しい場合があります。例えば、学校とPTAなど、個人情報保護法などがあり、壁があると感ずることもあるのです。科学的根拠があれば、個人的な見解としてではなく事実として証明ができますから、いろいろな組織と連携することも難しくなくなるのではないのでしょうか。

片山さん 私もおもしろいと思いました。教師はもちろん、医師や児童相談所の職員たちの背中を押すものになるかもしれませんね。

藤川さん 一口に「子どもの安全を守る」と言っても、網羅すべき分野は広範に渡ります。虐待、連れ去り、いじめ、窃盗など、問題はいろいろあります。子どもの被害件数を把握し、全体として何をを目指すのか、足りない部分はどこか、どこに対してどういうアプローチで臨むのか、見取り図があるといいですね。

私が個人的にも取組んでいるインターネットの問題については、問題の内容を絞り込むのが大事だと思います。ネットでは初心者が被害にあっていますので、初心者が被害にあわないシステム、または初心者が使える教育があるといいですね。加害者についての特定も必要ですから、分析してターゲットを絞っていきます。

各種の犯罪についても犯罪内容の分析が大切です。想定される被害者像、加害者像、地域環境をあぶり出し、社会へのアウトリーチも必要。一般の方に、もっと私たちの取り組みを知ってもらうため、広報活動することも考えていくべきです。

南さん アドバイザーとして、もっと積極的に関わるには、担当のプロジェクトを決めるというやり方もありますね。プロジェクト実施者へ、私たちの視点でアドバイスすることも必要なのではないでしょうか。

新谷さん 「子どものネット遊び場の危険回避、予防システムの開発」(代表者:下田 博次 特定非営利活動法人青少年メディア研究協会 理事長、以下、下田プロジェクト)で取組んでいる市民インストラクターも良い制度だと思います。さらに学校教育でインターネットのモラル教育をすることも有効ではないでしょうか。しかし今、教えているのはネチケツ(インターネットを利用する人が守るべき倫理的な基準や道德)ぐらい。インターネットの進化に教師の知識が追いつけないという現状があります。個人情報、道德、他人が嫌がることをしない。ネット利用に際してのスキルと同時に、基本的な道德やモラルの両面を子どもたちの発達段階に合わせて、身につけさせていくことが必要だと思います。

南さん 戦後、道德が形態化してしまいましたね。今は、保護者が子どもに、ちゃんとしつけをしているとは言い難い状況だと思います。学校教育の問題として解決しないとダメ。今、子どもを変えれば、将来の日本はもっと良くなります。



マネジメントグループが考える今後のネットワーク構築・アウトリーチ

片山さん 領域全体として、アウトリーチが不可欠です。今後3年、そして、その後の展開を視野に入れて考えると、ネットワーク構築はまだまだ弱いのではと感じます。積極的なアウトリーチ、ネットワーク構築をするため、マネジメントグループができることは何でしょう。

南さん 研究者と現場を結ぶコーディネーターや、地域活動を牽引するカリスマリーダーを育成してはどうでしょう。どんな施策でもキーパーソンがいれば成功します。残り3年でキーパーソンを教育し、そのキーパーソンが次世代の教育をし、新たなキーパーソンを育てるというサイクルを作るのです。

藤川さん キーパーソン教育は、教師とそれ以外の方とに分けるのが良いと思います。教師へは、5日間ぐらいの都道府県リーダー研修を設け、子どもの安全教育として広げるのです。学習指導要領に告示されるよう、行政へアプローチすることも怠ってはいけません。文部科学大臣を招いて、シンポジウムを開催するのも面白いかもしれません。

一般の方へは、青少年育成に関わっている人を地域ごとに集めて話をするのです。東京へ来て参加してもらうのではなく、これからは地域展開が重要です。

新谷さん 実践事例集を作りましょう。一般の方の目に入りやすくなりますし、やってみようという気持ちになるのではないのでしょうか。事例紹介のほかに、活動の表彰もするべきだと思います。表彰されることが、現場で組んでいる人のモチベーションを上げますから。

南さん 一般の方への実践事例紹介は、漫画というレベルで理解を促すのも良いですね。文字で説明する部分は最小限にし、知識がない人が見ても理解できるものを作りましょう。

藤川さん 実践事例集を、新書という形で出すのも良いのではないのでしょうか。安くて手軽に手に取れ、問題・話題になっている分野を専門家が書き下ろすという特徴が、この領域に合っていると思います。

片山さん アウトリーチ、そしてネットワーク構築は大切です。しかし、この領域の研究成果をすべて利用したとしても、犯罪をゼロにするのは難しい。私たちは、この領域の取り組みをきっかけに、他機関が活動を始めるなどの普及効果を期待しているのです。子どもや女性に対する声掛けやつきまといなどの行為を摘発し、性犯罪を未然に防ごうと、警視庁に発足したさくらポリスは、まさに「子どもの被害の測定と防犯活動の実証的基盤の確立」(代表者:原田 豊 科学警察研究所犯罪行動科学部 部長)との連携。また、「犯罪から子どもを守る司法面接法の開発と訓練」(代表者:仲 真紀子 北海道大学文学研究科 教授、以下、仲プロジェクト)は、司法面接法の研修に参加した人が、参加できなかった職場の同僚などに研修の内容を伝えているのだとか。この自発的な広がりがうれしいですね。

南さん 仲プロジェクトは、保護者が子どもにどう話しをするのか、という研究にもつながり、もっと広がりが期待できますね。領域設立当初は、地域の安全や教育などの分野が提案募集の中心となっていましたが、情報への対策など、研究分野が広範囲になったことは正解でした。

片山さん このようなすそ野の広がり、深みは、領域設立当初には予測できなかったことです。

研究成果を最短距離で全国に届けたい

片山さん 今後の領域の活動について、考えてみたいと思います。研究成果を、日本全国に広めるためには、どのような方法が考えられるでしょうか。

藤川さん 各地で1日かりのシンポジウムを行うというのも一案です。例えば、私が関わった大分県の場合は、講師を派遣し、インターネットの安全について2時間のシンポジウムを行いました。タイアップという形なので、お互い、経費を抑えることもできます。具体的にどのようなことをやれば効果があるか、悩んでいる自治体は多いと思いますので、この領域関係者から講師を出し、集客は地元の方へお願いするという方式は、喜ばれるのではないのでしょうか。

片山さん アピール性のある人に話をしてもらうと、広報という視点では効果的でしょうね。講師は各プロジェクトを組み合わせても良いし、地域性を配慮したテーマを考えても良いと思います。考えていくと、3～4つのグループがすぐに作れそうですね。これが広い意味でのネットワークです。

南さん アドバイザー、プロジェクトの実施者の誰が行けば、こんな話ができるということを一覧にして、対外的にアピールしていくと良いのではないのでしょうか。本当に必要としている方へ、研究成果を最短距離で届けたいですね。

新谷さん 一般の方へ届くアウトリーチにしたいですね。研究者同士の壁がないとは言えませんが、プロジェクト同士の連携は簡単ではないと思います。領域内にある競争意識を、プラスのエネルギーに転化して、研究成果を全国へ届けましょう。

片山さん 大切なのはアウトリーチ。研究者がアウトリーチをすることは大切ですが、本当に研究成果を必要としている方へ、直接ネットワークを張っていくという点が重要です。すぐに取組めることとして、領域内のネットワークの一環であるウェブサイトの充実があります。研究者のリストや文献のリストなどを充実させたいですね。例えば、自分が知っている研究者名と専門分野のリスト作成、関係した論文のリスト化などを実施していきたいと思います。研究者は、お山の大将ではダメ。この領域内では、全員がフラットな関係でネットワークを構築していきたいです。

Profile



片山 恒雄
Katayama Tsuneo

「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域総括。東京電機大学教授。地震工学、都市の地震防災に関する教育と研究に従事。阪神・淡路大震災後、防災科学技術研究所所長として、新研究分野の開拓とプロジェクト化を推進してきた。



新谷 珠恵
Shintani Tamae

社団法人東京都小学校PTA協議会会長。東京都青少年問題協議会委員、子どもたちのインターネット利用について考える研究会委員などに就任。学びあい、支えあいの人間関係ネットワーク、システム構築に尽力している。



藤川 大祐
Fujikawa Daisuke

東京大学大学院教育学研究科、金城学院大学助教授などを経て、千葉大学教育学部助教授、2010年より同教授（教育方法学、授業実践開発）。メディアリテラシー、ディベート、キャリア教育、数学、環境など、さまざまな分野での授業づくり、教材づくりに取組む。



南 哲
Minami Satoshi

浜松大学健康プロデュース学部長・教授、神戸大学名誉教授、大阪教育大学客員教授、教育学博士。安全教育学専攻。文部科学省の防災・防犯に関する安全教育教材作成に協力する中、大阪教育大学附属池田小学校や、寝屋川市立中央小学校の悲惨な事件に係って来た。